訳注『風月小誌』第一号（中）

要木純一

16 伝信機　横地邦松　隠岐平村人

一線何人架碧空。捷於飛電。詎論風。誰図告往知来妙。寄在無声無臭中。

【訓読】一線何人か碧空に架けし、飛電より捷きこと詎くんぞ風を論ぜん。誰か図らん往を告げ来を知るの妙の、寄せて無声無臭の中に在るを。

【大意】「伝信機」。電信線が一本、空にかかっている。一体誰がかけたのだろう。電信は稲妻より速い、まして風などは言わずもがな、あっという間に応答がなされる。孔子の「諸（これ）に往を告げれば来を知る」ということばが、同じく孔子のことばである「無声無臭」のこの電気に載せられて実現するとは思いもしなかったことだ。

【注釈】伝信―電信。幕末に実験的に導入、明治初期に全国に普及した。古くはこの標記が一般。明治十二年五月十五日松江に電信局が開設されたこと（『松江市史』）と関係するか。　横地邦松―不詳。儒者雨森精翁口授『便蒙日本政記纂語講義』（未見）に横地邦松筆記とあるという。それならば松江で雨森門下で学んだ人。　隠岐平村―現隠岐の島町平。江戸期よりある村名。明治十二年、周吉郡編入。　飛電―稲妻。潘岳・蛍火賦「頻たること飛電の宵に逝くが若し」。告往知来―論語・学而「諸（これ）に往を告げて来を知る者なり」。通説では、往は過去（すでに言ったこと）、来は未来（まだ言わないこと）の意であるが、ここでは電信の「往来」の意に掛けている。　無声無臭―詩経・大雅・文王「上天の載（こと）は声も無く臭も無し」。中庸にも引く。天道の不可知にして、玄妙なることをいう。ここでは、電気（また通信線、電気信号）の玄妙なることに掛けている。

老雨云。使用経語。絶無痕跡。

【訓読】老雨云う。経語を使用して、絶えて痕跡無し。

【大意】雨森精翁の評。四書五経の語を使っているのだが、その形跡をうかがわせないのはさすがだ。
【注釈】絶無痕跡―詩人玉屑「集句は惟だ荆公最も長ぜり。胡笳十八拍は混然として天成、絶えて痕跡無し」。

17 渓村夜帰　釈弘軒　吉田氏　出雲松江人

渓村日落乱雲翔。茅屋陰沈水一方。月黒橋頭人不レ見。野狐吹レ火夜茫々。

【訓読】渓村日落ち乱雲翔び、茅屋陰沈たり水の一方。月黒く橋頭に人見えず、野狐火を吹いて夜茫々。
【大意】「谷間の村に夜帰ったところ・・・」。谷間の村では日が没し吹き乱された雲が天を渡っていく。かやぶきの屋根が川の向こう側で黒々と沈んでいく。月の光はほとんどなく橋の上には人影が見えない。野狐が火の玉を吹きだした。とりとめもない夜がふけていく。
【注釈】釈弘軒―名は因成、また省試斎と号す。松江真光寺の僧、学を雨森精翁に受く。明治二十九年（一八九六）没。年五十八。　渓村―韓愈・杜工部の墳に題す「路渓村に入ること数百歩」。　乱雲―主に夕方の風に吹き乱された雲。王筠・夕霽を望む「連山乱雲を巻く」。杜甫・雪に対す「乱雲薄暮に低し」。　翔―傅玄・天郊饗神歌「景雲翔」。　茅屋―かやぶきの屋根。引いて、粗末なあばら家。　陰沈―本来は、雲が厚く、暗いこと。鮑照・都に還る口号「陰沈煙塞合す」。水一方―水は川。一方は向こう側。詩経・小雅・蒹葭「所謂伊の人、水の一方に在り」。　月黒―月がない真っ暗闇の状態。王昌齢・箜篌引「其の時月黒くして猿啾啾」。　橋頭―本来は橋梁の端で岸に接する部分。広く、橋のあたりを指す。施肩吾・望夫詞「却って恨む橋頭売卜の人」。　人不見―謝霊運・委羽山に題す「鶴の背に人見えず」。　野狐吹火―方鳳・故宮怨「妖狐火を吹き月地に堕つ」。吹火は、本来、火に息を吹き付けて、燃え上がらせる意であるが、ここでは日本の伝説により、狐が火の玉を吹き出す（狐火）と考えたい。蕪村「狐火や髑髏に雨のたまる夜に」。　夜茫茫―茫茫はぼんやりと広がっていく様子。蘇軾・永遇楽「夜茫茫たり」。

編者云。一読使二人心悸一。

【訓読】編者云う。一読人をして心悸せ使む。

【大意】編者の評。一読しただけで胸がドキドキする。
【注釈】心悸―恐れのあまり、心臓の鼓動が速まること。後漢書・梁節王暢伝「肌慄え心悸す」。

18 暁行　北尾漸一郎　出雲松江人　住東京

安将二千尺絲一。繫二此欲レ傾月一。立尽柳陰中。水風吹二散髪一。

【訓読】安くにか千尺の絲を将て、此の傾かんと欲する月を繫がん。立ち尽くす柳陰の中、水風散髪を吹く。
【大意】「朝の旅」。どうにかして千尺の糸で今しも傾いて没しようとするこの月をひきとどめたいものだ。柳陰で立ち尽くしていると、川からの風にバラバラになった髪が吹き上げられる。
【注釈】北尾漸一郎―天保十一年（一八四〇）生まる。松江藩の侍医、一時の名医の多納光儀、田代響平と名を斉しうす。のち居を東京に移す。気象学者北尾次郎の養父。　立尽―ここは日本語の「たちつくす」をもとにした和製漢語をわざと使ったのであろう。有名な柳永・玉蝴蝶其の一「断鴻声裏、立尽斜陽」は、夕陽が無くなるまで立ち続けることだから、ここも夜が尽きるまで立ち続けるというつもりなのかも知れない。　散髪―本来は髪をくくらずにばらばらにすること。ここは、明治四年の散髪令によって、ちょんまげをやめて、西洋風の髪型、散切り頭にしたことを意識するであろう。時代の変化を受け容れつつも、とまどう気分がこの詩にただよっているのではないか。

老雨云。婉而雅。宋人口吻。○勉斎云。雅而潔。

【訓読】老雨云う。婉にして雅。宋人の口吻。○勉斎云う。雅にして潔。
【大意】雨森精翁評。婉曲であってしかも風雅。宋朝の文人の口ぶりだ。○山村勉斎評。風雅であってしかも清潔。
【注釈】婉而雅―はっきりいわない面白さとしっかりした高雅な体を兼ねている。二つの関係するような、反発するような気分の取り合わせを楽しんだ評。李廌・宝干山茶「婉雅たる瑞荷の花」。　宋人口吻―上述の柳永の詞を意識するかなよやかな中にも強さを秘めた作風。　雅而潔―高雅はもちろん、さらに世俗の汚れがない。これも二概念の微妙な関係の中にこの作があることをいう。周密・斉東野語・文荘公滑稽「少き自り雅潔を好み、性は滑稽なり」。

19 春夜観梅　淞雨散人　相見氏　名敏修　字允叔　出雲松江人

香雪霏々夜洒レ袍。満身清気勧二春醪一。忽然呼レ快人抛レ盞。月出二梅花一三尺高。

【訓読】香雪霏々として夜袍に洒ぎ、満身の清気春醪を勧む。忽然として快しと呼び人盞を抛る、月梅花より出づること三尺の高き。

【大意】「春の夜、梅を観賞する」。香る雪とでもいうべき梅花が次々とこの夜着物に降り注ぐ、体中が清らかな気にみちたようで、春絞りたてのどぶろくの杯が進む。突然、すばらしいと叫んで、盃をほうった。月が梅花から三尺ほど高くにかかっているではないか。

【注釈】淞雨散人—相見淞雨。松江の人、篆刻を善くす。明治二十四年（一八九一）没。年四十八。美術学者相見香雨の父。　香雪—白い花。特に梅花の散る様。蘇軾・月夜客と杏花の下に飲む「争いて長条を挽いて香雪を落とす」。　霏々—雨や雪が降る様。　洒袍—蘇軾・凌虚台「微雪袍に洒いで斑なり」。袍は上着。　春醪—春に出来る酒。醪は、もろみ、濁り酒だが、広く酒を指すと考えても良い。陶潜・挽歌の辞に擬す「春醪浮蟻を生ず」。　呼—叫に同じ。　抛盞—酒宴などで、興奮する仕草。白居易・諸客と空腹にして飲む「盃を抛って同坐に語る」。

編者云。三四清麗可レ愛。○又云。夜作レ乱如何。

【訓読】編者云う。三四清麗にして愛す可し。○又云う。夜は乱につくるは如何。

【大意】編者評。三句目、四句目は、清らかにして美麗、愛すべき味わいのある表現だ。○さらに。「夜」字を「乱」字に変えたらどうか。

【注釈】清麗—清新で華麗。すっきりしているがけれんみもある感じ。　夜作乱如何—題にすでに春夜とあるので重ねていう必要はなく、適当な副詞を入れたらよいということであろう。淞雨は、昼ではなく、夜だからこその興趣と考えたのであろうが。

20送三岡本生巡二視都留郡一（岡本生の都留郡を巡視するを送る）

星秋瘦士　吉岡氏　名弘　字篤夫　松江人　住駿河沼津

篠籠之山鬱巃崧。猿橋之水激二怒瀧一。世人争説行路難。君今秪役向二其中一。苟能心平道自坦。万苦辛中亦可レ悰。君不レ見世途到処足二危険一。豈啻猿橋与二篠籠一。

【訓読】篠籠の山は鬱巃崧たり、猿橋の水は怒瀧を激す。世人争いて説く行路の難きを、君今秪役して其の中に向かう。苟しくも能く心平らかにすれば道自ら坦ならん、万苦辛中亦た悰しむ可し。君見ずや世途到る処危険足る、豈に啻だに猿橋と篠籠とのみならんや。

【大意】「岡本氏が都留郡に公務出張で巡視にいくのを送る詩」。笹子峠のあたりの山はうっそうと樹木が茂り、猿橋の下を流れる川は、怒り狂ったようなしぶきを上げている。世の中の人々が道中の厳しさを声高に言うその場所に、今君は公務で赴こうとしている。心が平穏でありさえすれば、道も自然と平坦に感じられるであろう。大変な苦労も楽しみになるさ。ご覧よ、世間の道こそいたるところ危険ばかりだ、猿橋と笹子峠だけではないぞ。気をつけていきたまえ。

【注釈】岡本―同僚か。不明。　都留郡―古代より山梨県（甲斐国）にあった郡であるが、明治十一年南北都留郡にわかれて行政区画としては消滅。　星秋瘦士―吉岡星秋。名は弘、字は篤夫、沢野含斎・雨森精翁に従学し、また詩を苔洲・枕山・黄石・松塘諸氏に学ぶ。松江藩の行人となり、みずから士族を辞し、藩主に説きて藩籍をもって奉還す。東京に移り住み、のち静岡・高知・鹿児島の裁判所長を歴任す。明治二十五年（一八九二）没す。年五十一なり。これは、静岡に赴任していた頃の作品。　篠籠―笹子峠。山梨県大月市と甲州市の境にある峠。甲州街道の難所として有名。笹は国字であるので、篠籠の標記は古くから行われていた。　鬱巃崧―韓滬・晩興「山近くして鬱として巃嵸たり」。杜甫・同谷七歌「古木巃崧枝相樛う」。　猿橋―山梨県大月市にある桂川に架かる刎橋。甲州街道の難所であり、名所。　怒瀧―たぎる波。逆巻く波。虞集・韓伯高の浙西に僉憲たるを送る「応に勝るべし愁吟の怒瀧に対するに」。中国ではソウ（サウ）の音が優勢だが、ここでは押韻のため、ロウと読む。　行路難―李白の詩、行路難より。道を行くことが困難なこと。転じて、世渡りの難しさの比喩となる。　秪役―祇役。秪は慣用。謹んで王命を奉じて出張すること。公務。

悰―歓楽の意。押韻のために用いた。謝朓・遊東田「戚戚として悰しみ無きに苦しむ」。　危険―もともとは山道の険しい様。引いて一般に危険なものをさす。董逃行「山頭危険にして道路難し」。　君不見―楽府で読者に呼びかける常套の表現。反語として用いる。君も分かっているではないか。注目せよ等のニュアンスがある。　世途―世間の道。俗世の中で生きていくこと。李白・古風五十九「世途翻覆多し」。

老雨云。似乙自二李白行路難一来甲。苟能二句。解人語。【甲点はもと甲レ点に作る。今改む】

老雨云う。李白の行路難自り来るに似たり。苟能の二句は、解人の語。

【大意】雨森精翁評。李白の「行路難」に基づいているようである。「苟能」以後の二句は、世の中のことがよく分かっている人のことばといえよう。

【注釈】李白―行路難三首がある。　苟能二句―心の持ちようで、危険に対処でき、人生を楽しむことが出来る。詩の前半は人生の困難を指摘し、後半人生訓に転ずる。　解人―道理が分かっている人。世間知に傾くか。三国志・呉志・孫覇王伝「解人当に爾るべからず邪」。

21　秋晩即成　峡南居士　秋山氏　東京人

山山秋色老。遠樹暮雲横。有レ約僧来晩。柴門墜葉声。

【訓読】山山秋色老い、遠樹暮雲横たわる。約有るも僧来ること晩し、柴門墜葉の声。

【大意】「秋の夕暮れ。即興の作」。どの山も紅葉して秋の景色が老いていくようだ、遙か遠くの木々に暮れなずむ雲が横たわっている。約束したのに、和尚さんなかなか来ないな。柴を束ねた粗末な門に葉が落ちるおとだけがきこえる。

【注釈】峡南居士―不明。峡南は甲斐国のこと（山梨県。峡はかいと読む）。居士は、在俗の仏教信者。　山山―山という山全てが。日本語の「やまやま」とはニュアンスが違う。高啓・大痴小画「山山秋樹赤し」。　秋色老―李白・秋に宣城謝朓北楼に登る「秋色梧桐老ゆ」。雍陶・韋処士郊居「門外晩晴秋色老ゆ」。　柴門―しばを編んでつくった門。引いて、質素で閑静な草庵。陶潜・癸卯歳始春古田舎を懐う二首其二「長吟柴門を掩う」。

編者云。冷淡有レ趣。

【訓読】編者云う。冷淡 趣 有り。

【大意】編者評。心静かに落ち着いた描写、興趣がある。

【注釈】冷淡―濃艶の対。あっさりとしたさびのある味わい。白居易・白牡丹「白花冷淡人の愛する無し」。　有趣―趣がある。風雅である。王融・芳樹「暗風多く趣き有り」。

22早春病中作　香洲釣客　米田氏　出雲松江人

経レ旬疎懶廃二吟哦一。一枕悠然養二宿痾一。骨相病来同レ鶴瘦。光陰夢裏似二駒過一。暖吹二楊柳一烟痕嫩。春入二梅花一雪色多。布襪茅鞋無レ可レ用。踏青時節奈二詩魔一。【踏青はもと蹈青に作る。今改む】

【訓読】旬を経て疎懶吟哦を廃し、一枕悠然として宿痾を養う。骨相病来鶴に同じく痩せ、光陰夢裏駒の過ぐるに似る。暖かきは楊柳を吹いて烟痕嫩かに、春は梅花に入りて雪色多し。布襪茅鞋用いる可き無し、踏青時節詩魔を奈かんせん。

【大意】「早春病床にあっての作」。病気になってからもう十日か。体がだるくて、詩を吟ずることもやめてしまった。ひとまず枕について、ゆったりとした気分で長い病を養生することにした。我が体躯は病気になってから、鶴のそれのように痩せている。時間は夢の中のようで、馬が目の前を一瞬で駆けるように急速に過ぎていく。暖気が柳に吹き付けてかすみで湿ったあとが柔らかな艶をもっている。春の気配は白梅に入り込んで、季節感とは裏腹にまっしろな雪景色が広がるように見える。靴下や靴を履いて外出することもままならず。まもなく踏青の遠足でみんなうきうき跳ね回る時期になるというのに、悪魔に魅入られたように自然の中で詩を作りたいこの衝動を、私は一体どうすればいいのだ。

【注釈】香洲釣客―米田香洲。名は事、天鱗に学びて、詩を善くす。大正二年（一九一一）没す。年五十二。　経旬―旬は十日。杜甫・江畔独り歩んで花を尋ぬ七絶句其の一「旬を経て出でて飲み独り空床」。　疎懶―疎は疏の俗字。なまけること。嵇康・山巨源に与えて絶交する書「経学に渉らず、性復た疏懶たり」。杜甫・西郊「疏懶意何ぞ長き」。吟哦―抑揚をつけて詩を朗誦すること。また、声に出して詩を推敲すること。王安石・石賡の帰寧するを送る「久しく

已に吟哦を廃す」。　一枕―枕について一眠りすること。枕は動詞として読むか。丁仙芝・薦福寺英公新たに禅堂を搆うるに和す「一たび枕す西山の外」。　悠然養宿痾―悠然は、外物を心的にはるかなものとして心を動かさないこと。ここでは、病苦を気にせず、ゆったりと構えること。陶潜・飲酒「悠然として南山を見る」。孔武仲・松下「悠然として天和を養う」。宿痾は、長い時間いつまでも留まり続ける病気。陸游・北窓「宿痾二竪を走らしむ」。　骨相―骨格。引いて容貌、体格。韓愈・韶州張端公使君に留別す「自ら嘆ず虞翻骨相の屯なるを」。　鶴瘦―下句と対なので、「鶴の瘦するに同じ」と訓読すべきであろう。白居易・楊九弘貞長安病中寄せらるに酬ゆ「鶴瘦せて貌弥よ清らかなり」。光陰―光は日。陰は月。月日、引いて時間。　似駒過―荘子・知北遊「人生天地の間、白駒の郤（隙）を過ぐるが如し」。過隙白駒と熟して、人生の短さにたとえる。　暖吹―吹は本来名詞（吹く風。去声）で、暖風の意であるが、ここでは吹を動詞（平声）で用いて、暖気を帯びた風が吹くの意味で用いている。唐高宗・守歳「条は煖吹を含みて分かる」。　楊柳―広くやなぎを指す。詩経・小雅・鹿鳴「昔我れ往く矣、楊柳依依たり」。　烟痕―烟痕は厳密には靄の残したあとの意味であるが、靄自体を指すと考えてもよいであろう。　嫩―嫩は、若い草木の柔弱なさま。引いて自然現象のかすかなさま。ここは靄がうっすらとかかっているの意に解してもよいであろう。仲殊・驀山渓「青豆初芽を破り、烟痕を払い、一枝独り嫩かなり」。　春入梅花―文天祥・宴朱衡守致語口号「春梅花に入りて新雨香る」。　雪色多―雪景色。徐陵・春情「雪色故年残る」。また雪のような白色。杜甫・久雨、王将軍を期するも至らず「射殺す林中雪色の鹿」。布襪茅鞋―布で作った足袋、かやで作った靴。共に平民の粗末な履き物。これらを履いて外出することをいう。茅鞋は、わら靴を意識した日本漢語か。杜甫・奉先劉少府の新たに画く山水障の歌「青鞋布襪此従り始まる」。　無可用―欧陽脩・漁家傲「顧うに我が薄才用いる可き無し」。　踏青―春の青草を踏んで遊ぶ中国の風習。春の野遊び。踏（タフ）はスキップをして跳ね回る感じ。蹈（タウ）は、蹈襲の蹈で、決められたステップを足でたどる感じ。従って踏青字の方が良いと思われるが、ごく稀に蹈青の語も使われる。楊万里・三月晦日越王台に遊ぶ「自ら憐れむ蹈青の人に及ばざるを」。時節―他でもないこの季節になんとまあという感じ。杜甫・江南に李亀年に逢う「落花の時節に又君に逢う」。　詩魔―狂気のごとく、詩作を非常に好むこと。白居易・酔吟二首、其の二「酒狂又詩魔を引いて発す、日午悲吟して日の西

するに至る」。

老雨云。頷聯似二顧鉄卿一。○編者云。頸聯似二真山民一。

【訓読】老雨云う。頷聯は顧鉄卿に似る。○編者云う。頸聯は真山民に似る。

【大意】雨森精翁評。第二聯は、顧鉄卿の作風に似ている。○編者評。第三聯は真山民の作風に似ている。

【注釈】顧鉄卿―清代の文学者、顧禄（一七九三年―一八四三年）。鉄卿はその字。呉県の人。蘇州風俗を紹介した『清嘉録』が日本で有名。ここで、彼のどの詩句を意識しているのか不明。　真山民―南宋の詩人。宋の遺民として生きたらしいが、本名経歴不明。その著「真山民詩集」は特に日本で読まれた。ここではその有名な五律「新春」を意識するか。「余凍雪纔かに乾き、初晴日驟かに暄かなり。人心は新歳月、春意は旧乾坤。煙は碧にして柳色を回し、焼は青くして草魂を返す。東風厚薄無く、例に随いて衡門に到る」。

23 秋湖晩景　桂窓学人　中村氏　出雲松江人

白雁黄蘆浅水秋。平波十里夕陽収。随レ風烟靄乍濃淡。一帯湖山沈又浮。

【訓読】白雁黄蘆浅水の秋、平波十里夕陽収まる。風に随って烟靄乍ち濃淡、一帯の湖山沈んで又浮かぶ。

【大意】「秋の宍道湖。暮れ方の景色」。秋の湖は浅い。白鳥と黄色に枯れた蘆が見える。静かな波が十里四方に広がり、水平線に夕日が沈んでいく。風に乗ってもやが濃くなったり薄くなったりする。それにつれ、湖と周囲の山一帯が沈んでは消え、浮いてはあらわれるように見える。

【注釈】桂窓学人―不明。中村姓の当時松江で有名な詩人に中村笠村、中村鶯山がいるが、同定の決め手に欠ける。白雁―マガモの一種。やや小柄。全身純白色。中国では、儀礼、贈答用に珍重され、詩にもよく詠まれる。冬鳥でまれに日本にも来る。ただ、ここでは、宍道湖で普通に見られる白鳥と考えて良いのではないか。　黄蘆―枯れたアシ。晩秋、冬の景物。王昌齢・九江口作「望み尽くす黄蘆の洲」。　浅水―浅瀬と言うよりも、秋から冬に水が涸れた状態をいうのであろう。司空曙・江村即事「只だ蘆花浅水の辺に在らん」。　平波―さざ波。静かに広がる湖面。李商隠・病中・・・

「十頃平波岸に溢れて清し」。　十里―宍道湖の一周が十日本里であるが、ここは数にこだわる必要はあるまい。　夕陽収―賓鞏・隠者を訪ぬるも遇わず「槿花半点夕陽収まる」。　烟靄―烟も霞ももや、かすみ。王勃・慈竹賦「崇柯振いて烟靄生ず」。　乍濃淡―欧陽脩・初寒「雲容乍ち濃淡」。　一帯―本来は帯状のものをさしたが、引いて、地域や風景の広がりを言う。梵琦・浄土を懐う「一帯の雲山一の草堂」。　湖山―宍道湖とその周りの山山。孟浩然・九日龍沙作「湖山興を発すること多し」。　沈又浮―小雅・菁菁者莪「泛泛たる楊舟、載ち沈み載ち浮く」。王縝・馬龍州に宿る其の一「世態波の如く沈み又浮かぶ」。靄に見え隠れする景色が浮沈しているさまとともに、自らが船に乗って揺られているような非現実的な感覚をも表現したかったのではないか。

老雨云。清淡。

【訓読】老雨云う。清淡。

【大意】雨森精翁評。清らかで淡い情景。

【注釈】清淡―清潔淡泊。人格について言うことが多いが、自然の静かな様をもいう。世説新語・言語注引王中郎伝「祖は東海太守丞、清淡平遠」。

24晩秋布志名帰舟　石逕山人　中山氏　出雲松江人

山色依微看欲レ無。篙頭纎月映二寒蘆一。疎鐘声落篷窓裡。恰似楓江夜泊図。

【訓読】山色依微として看るみる無からんと欲す。篙頭の纎月寒蘆に映ず。疎鐘声は落つ篷窓の裡。恰たかも似たり楓江夜泊の図。

【大意】「晩秋。布志名港に帰る舟」。山の姿はぼんやりとしてみるみる消えていこうとしている。乗っている船、竿の先に細い月がかかっていて、それが寒々とした枯れ蘆を照らしている。まばらな鐘の音が　苦船に入り込んでくると、あたりはあたかも「楓橋夜伯」を絵にしたかのよう。

【注釈】石逕山人―中山三寿。隠岐騒動の頃の、第二八雲丸事件等に関わった人らしい。維新後は教育者。　布志名―

現松江市。宍道湖南岸の小港。陶器のふじな焼きで有名。　山色―山の景色全体をさすが、ここでは色に重点があるであろう。江淹・征虜始安王に従う道中「山色雲と平らかなり」。　依微―ぼんやりとした様を表す畳韻の擬態語。謝霊運・江妃賦「清管の依微たるを奏す」。　看欲無―看は、事態を変えることも出来ず、手を束ねて見つめるほかない状態を表す動詞。まのあたり、みすみす等の訓がある。菩薩蛮・楊基「窓を隔てて看るみる無からんと欲す」。　篙頭―篙を二字に引き延ばした口語。ここは、船竿の先のような気分で使っているか。楊万里・顕済廟前の石磯を過ぐ　竹枝詞其の二「篙頭を撑し得て都て是れ血なり」。　繊月―三日月にもならない細い月。新月。杜甫・夜左氏の荘に宴す「風林繊月落つ」。　映―本来はチラチラと見える様子を表す動詞だが、ここは「うつる」の意味で使っているであろう。寒蘆―冬の枯れたアシ。沈約・雪を詠む、応令「思鳥寒蘆に聚まる」。　疎鐘―間を置いて鳴る鐘の音。疎は疏の異体字。王維・輞川に帰りて作る「谷口疏鐘動く」。　声落―落は、進行的（落ちている）ではなく、結果的（落ちた）に用いる場合が多い。寺は湖面よりかなり高いところにあるのだろう。　篷窓―篷は、竹や蘆で編んだむしろ。船や車をおおう。蓬字を使うこともあるが、要するに粗末な作りの船をいう。鄭谷・江上風に阻まる「船は篷窗を閉ざす細雨の中」。蘇軾・万州太守高公・・・「蓬窗の高枕雨は繩の如し」。　楓江夜泊―張継・楓橋夜泊「姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘声客船に到る」に基づく。楓橋夜泊は、テクストによっては夜泊楓江に作る。歴代、この詩に関して絵画が描かれてきたが、ここは特定の絵ではなく、作者の頭にイメージされたものであろう。

老雨云。画景宛然。

【訓読】老雨云う。画景宛然たり。

【大意】雨森精翁の評。絵に描いたような風景がありありと思い浮かぶ。

【注釈】画景―画中の景色の意。特定の絵を指すのではなく、山水画の中の世界のようだということであろう。　宛然―ある場面を彷彿とさせることだが、ぼんやりではなく、その場面がはっきりとイメージが浮かぶ状態をさす場合が多い。関尹子・五鑑「譬えば猶お昔游再び到り、記憶宛然たるがごとし」。

25 春日閑適　六首　愛月閑客　楢崎氏　名卓爾　字子高　出雲松江人。

偏愛壺中日月。豈悕世上功名。午窓忽覚幽夢。黄鳥隔レ花一声。【「世上」はもと「浮世」。風月小誌二号附正誤に「浮世ハ世上ノ誤」とするのに従う】

【訓読】偏えに愛す壺中の日月、豈に悕まん世上の功名。午窓忽ち覚む幽夢、黄鳥花を隔てて一声。

【大意】「春の日を心静かにたのしむ」。壺中天のごときこの閑居で時を過ごすのがとにかく大好き。世の中の名声などちっとも欲しくない。昼下がりの窓の下で今日も昼寝、ぼんやり夢をみていたところ、はっと目が覚めた。鶯が花の向こうで一声鳴いたのであった。

【注釈】愛月閑客―楢崎卓爾については不詳。　閑適―心静かにたのしむこと。詩題によく使われる。白居易・閑適「就中閑適たるは是分司」。珍しい六言絶句。　偏愛―特に愛する（他ではだめだ）。後漢書・袁紹伝「紹の後妻劉寵有り、而して尚を偏愛す」。　壺中日月―壺の中の（日や月のある）別天地。ここでは俗世を離れた自宅を言う。後漢書・費長房伝「（市場で不思議な老人に会った）長房は旦日に復た詣る。乃ち与に壺中に入る。唯だ見る、玉堂厳麗にして、旨酒甘肴、其の中に盈衍す。共に飲み畢りて出づ」。李白・下途石門旧居に帰る「壺中別に有り日月の天」。呂岩・七言「壺中日月胸襟に在り」。　悕―本来は悲傷の意であるが、仏典で希と同じように用いるようになった（悕求等）。求めること。願うこと。　世上―世間、この世（において、における）。戦国策・秦策一「人は世上に生まれては、勢位富貴、蓋（なん）ぞ忽せにす可けん乎哉」。正誤前の「浮世」も浮き沈みの激しい世の意で、大差は無いようだが、日本語の「うきよ」の語感を嫌ったか。あるいは六言の平仄格式で、世上と仄仄が続いた方がのぞましいと考えたか（浮生は平仄）。功名―功績と名声。引いて、科挙に合格し、官吏として昇進すること。ここは役人世界のことを言っているようである。史記・管晏列伝「吾幽囚せられ辱めを受く。鮑叔我を以て無恥と為さず。我の小節を羞じずして功名の天下に顕れざるを恥ずるを知れば也」。李頎・放歌行「世上の功名は取るを解せず」。　午窓―昼の窓のあたり。昼寝（の寝覚め）とセットで詠まれることが多い。王安石・悟真院「午窓残夢鳥相呼ぶ」。　忽覚―このあたり、李白・春日醉いより起きて志を言う「世に処ること大夢の若し」、「覚め来って庭前を観れば、花間一鳥鳴く」を意識する。蔡邕・飲馬長城窟行「夢

に我が傍らに在りと見えしが、忽ち覚めれば他郷に在り」。　幽夢―ぼんやりとした、とりとめもない夢。王昌齢・東溪に月を玩ぶ「澄清幽夢に入る」。　黄鳥―中国においては諸説があるが、多くはコウライウグイスと考えてよいであろう。ここでは、日本のウグイスあるいは一般に黄色の鳥。　隔花―花を間においた向こう。　一声―日本のウグイスの鳴き声にふさわしい表現であろう。

老雨云。得レ体。○編者云。絶塵之風標可レ想。

【訓読】老雨云う。体を得たり。○編者云う。絶塵の風標想う可し。

【大意】雨森精翁評。きちっとした作り方だ。○編者評。作者の世俗の塵埃を絶った、高邁な風雅が如実に想像される。

【注釈】得体―もとは挙止が例にかなっていること。礼記・仲尼燕居「官其の体を得」。引いて、言行や修辞が、規範通りきちっとしていることを指す。ここは、六言絶句の規範にかなった作品であることを言っているのかも知れない。絶塵―塵にまみれた俗世を超越すること。范曄・逸民伝論「蓋しその塵を絶って反らず、夫の作者に同じきを録す」。風標―内面の風雅な本性が、文章や姿など外面に表現されたもの。南斉書・文学伝論「文章なる者は、蓋し情性の風標、神明の律呂なり」。　可想―可想而知。推して知るべしと同意。説明がなくても、ありありと想像できること。王茂・野客叢書「酸寒の壮んなること、想いて而して知る可し」。

26閨中春夜　翠軒主人　森氏　名信　字士敬　出雲松江人

孤枕眠醒夜色幽。欲レ鉤二簾箔一又慵レ鉤。白桜花外朦朧月。偏入二深閨一照二暗愁一。

【訓読】孤枕の眠りは醒めて夜色幽かなり、簾箔鉤けんと欲するも又鉤くるに慵し。白桜花外朦朧たる月、偏えに深閨に入って暗愁を照らす。

【大意】「女性の寝室。春の夜に」。ぽつんと枕が一つ、ひとりぼっちで眠っていたところ、ふと目が覚めると、外の夜の景色がかすかに見える。すだれをかかげて見ようと思ったが、億劫でやめてしまった。桜が白く咲いている向こうはぼんやりとした月。その光が、よりにもよって他でもない私の寝室に入ってきて、私の姿を照らすので、人知れぬ物思

いはますます募ってくる。

【注釈】閨中―女性の寝室のなか。夫や愛人に見捨てられて、独り寝をかこつ場合が多い。　翠軒主人―森翠軒。名は信通、繁之助と称す。松江の人。　孤枕―独り寝をすること。李白・月下独酌其の三「酔後天地を失い、兀然として孤枕に就く」。　眠醒―詩語としてはこの二字だけでは熟さぬ。睡覚（眠りが覚める）の類推か。方千里・玉燭新　海棠「春眠醒む」。　夜色―夜の暗い景色。江淹・外兵舅の夜集「烟光夜色を払う」。　幽―薄暗くて見えにくい。　鉤―簾を掛けるフック。ここは動詞化。杜甫・舟月駅に対す。寺に近し「簾を鉤けて独り未だ眠らず」。　簾箔―簾も箔も竹や蘆製のすだれ。三輔黄図・漢宮「皆金玉珠璣もて簾箔と為す」。　慵鉤―陸茜・江城梅花引　送春「簾鉤を掛くるも、又鉤くるに慵し」。　白桜花外―桜は日本では花を愛でるのに対し、中国ではさくらんぼを詠むことが多いが、稀に花にも言及する。陸亀蒙・襲美の春夕崔諫議桜桃園宴に陪すに和す「花外烟は濛として月は漸く低し」。　朦朧月―晏殊・蝶恋花其の五「朱簾一夜朦朧たる月」。　偏―一般的な状態を越えて、一つの方向に偏る意。わざわざ、ことのほか、意外に、の気分を伴う。ここでは、そんなことをしなくてもいいのに、意地悪だという感じか。闇ならまだしもよい。月は、遠い人を思わせるもの。月があるからこそ物思いはいやますのである。　深閨―婦女子の部屋。深字により、世と隔絶した孤独感が表される。白居易・長恨歌「養われて深閨に在って人未だ識らず」。　暗愁―暗は暗殺の暗と同じく、人に知られず、ひそかにという意。ここでは、暗澹たる気分もかねるであろう。梅堯臣・惜春三首其の一「暮雨霏霏として暗愁を起こす」。

老雨云。偏字作者苦心処。○編者云。三四無限情味。

【訓読】老雨云う。偏の字は作者苦心の処。○編者云う。三四は無限の情味なり。

【大意】雨森精翁評。「偏」の措辞は、作者が苦心しているところだ。編者評。第三句四句に無限の情趣がこめられている。

【注釈】情味―おもむき、気分。劉劭・人物志・九徵「情味に発す」。ここでは、閨怨の深さがこめられているということであろう。

27 春日偶成　次二睡仙詞兄韻一（睡仙詞兄の韻に次す）　静心逸史　平賀氏　名尚信　字秀民　出雲松江人

暖風晴日適二吟情一。片々穿レ花蝶翅軽。庭院昼長春寂寞。茶声香影一窓清。

【訓読】暖風晴日吟情に適す、片々花を穿って蝶翅軽し。庭院昼長くして春寂寞、茶声香影一窓清らかなり。

【大意】「春の日にたまたまできあがった作品」。暖かい風、晴れた太陽、こんな日こそ詩を作るのにふさわしい。たくさんの蝶が軽やかに羽をはためかせて、花の間に見え隠れする。庭は、昼がゆっくりと過ぎてゆき、春の気配は孤独感に閉ざされる。茶を沸かす音、花の色、窓から見える全てが清らかになったような気分。

【注釈】静心逸史―名は尚信、字は秀民、別号楽之。静遠の男。亦楽舎の都講、のち松江図書館の司書。大正二年没す。年五十五。　暖風晴日―薛能・雑曲歌辞其の六　楊柳枝「暖風晴日浮埃を断つ」。王安石・初夏即事「晴日暖風麦気を生ず」。吟情―詩を作りたくなるような興趣。呂岩・七言其の一百九「醉眼の吟情慵しや慵しからずや」。　片々―花弁がたくさん散る状態を形容する語だが、蝶の羽に当てはめた。劉克荘・卜算子其の二「片片蝶衣軽し」。　蝶翅―朱慶餘・薔薇の花に題す「光は蝶翅に凝りて明らかなり」。　穿花―杜甫・曲江二首其の一「花を穿つ蛺蝶は深深と見ゆ」を意識。庭院―院は建物に囲まれた庭だが、ここでは一般的に庭を指す。南史・陶弘景伝「特に松風を愛す。庭院皆松を植う」。昼長―春の日永の倦怠感は、日本中国ともにある感覚。　春寂寞―白居易・戯れに新栽の薔薇に題す「少府妻無く春寂寞たり」。　茶声―茶釜で湯を沸かす音であろう。楊万里・初三日翟園に遊ぶ「松風一鼎煎茶の声」。茶釜を沸かす音はよく松風の音にたとえられる。　香影―香炉や香煙の影が本来の意味だが、後に花（特に梅）の景を指すようになった。劉克荘・梅花十絶其の九「香影有る処即ち追攀す」。　一窓清―鍾惺・舟荻港を発す「香茗一窓清らかなり」。

勉斎云。何其声似二放翁一也。

【訓読】勉斎云う。何ぞ其の声放翁に似たる也。

【大意】山村勉斎評。この詩から聞こえてくるような茶を沸かす音は、何と陸游の詩の気分に似ていることか。

【注釈】声―あるいはこの詩全体から聞こえるような気韻か。　放翁―南宋の詩人陸游の号。愛国詩人と言われるが、この詩のように、日常を描く閑適の詩が多い。陸游の詩はあまたあり、具体的にどの作品のどのような表現をさしていっ

ているのか不明。

28題画　松濤山人　村上氏　名寿　字仙齢　出雲松江人

斜憑二玉檻一懶レ成レ粧。黙読相思書幾行。妬殺夭桃花下水。春風夢暖両鴛鴦。

【訓読】斜めに玉檻に憑りて粧を成すに懶し、黙読す相思の書幾行。妬殺す夭桃花下の水に、春風夢暖かく両鴛鴦あるを。

【大意】「絵に書き付けた詩」。からだを斜めにして欄干に寄りかかり、けだるくて化粧も途中でうっちゃったまま。彼から来た恋文を黙って何行か読む。ああねたましい。桃の花のもとに流れる水に、暖かい春風に吹かれて夢心地に、二羽のおしどりが仲良く泳いでいるのが。

【注釈】題画―絵に詩を書き付けること。もとの絵がどのような絵か不明だが、この詩によって何をどのように書いているか、想像することが出来よう。　松濤山人―村上琴屋（一八六一―一九三二）。名は寿夫。字は仙齢。後に琴屋と号した。松江の人。詩を雨森精翁、平賀静遠に学ぶ。剪淞吟社初代社長。隠岐島司、松平家家令等。　斜憑―白居易・閨婦「斜めに繡床に憑って愁えて動かず」。　玉檻―檻は欄干。ここは庭園の池のそばにある欄干か。玉は美称。孟康・詠日「玉檻晨曦漾う」。　懶成粧―恋が成就せず女としてのたしなみをする気にもなれない様。張正見・賦して佳期竟に帰らず、を得たり「啼を銜み鏡を払い粧いを成さず」。　黙読―詩語ではない。新しい語のようである。　相思―お互いに思い合うことから、恋愛を主に指す。趙孟頫・剛父即事に次韻す絶句其の一「寄せず相思の書一行」。　妬殺―嫉妬すること甚だしい。殺は強意。李白・玉壺吟「奈かんともする無し宮中人を妬殺するを」。　夭桃―詩経・周南・桃夭「桃の夭夭たる、灼灼たり其の華」により、艶麗な桃の花全般を指すようになった語。謝荘・懐園引「夭桃晨暮に発す」。　両鴛鴦―劉孝威・擬古「一双の翡翠両の鴛鴦」。

老雨云。未レ知。情郎書中説二出何等事一。○勉斎云。如レ画。

【訓読】老雨云う。未だ知らず情郎の書中何等の事を説き出すかを。○勉斎云う。画の如し。

【大意】雨森精翁評。男は恋文の中でどんなことをいっているんだろうね。○山村勉齋評。絵のように情景が思い浮か

ぶ詩だ。

【注釈】未知―＋疑問文で、・・・かわかる状態に達していない意。・・・かしら。　情郎―情夫。愛人。韓偓・花の落つるを厭う「猶お疑う未だ情郎の意に満たざるかを」。

29獲二清人張庚水墨山水幅一喜而有レ作（清人張庚の水墨山水幅を獲て、喜んで作有り）　静遠居士

隔レ水青山鬱崱屴。一片行雲逐二飛翼一。烟鎖二楼閣一有又無。毫端変化妙無レ極。誰居画レ之張瓜田。秀韻堪レ看稽古力。君不レ見世間多少丹青家。胸無二書巻一浪弄レ墨。

【訓読】水を隔つる青山は鬱として崱屴、一片の行雲飛翼を逐う。烟楼閣を鎖して有りて又無し、毫端の変化妙極り無し。誰ぞや之を画く張瓜田なり、秀韻看るに堪えたり稽古の力。君見ずや世間多少の丹青家、胸に書巻無く浪りに墨を弄するを。

【大意】「清国の画家張庚作山水画の掛け軸を手に入れて、喜びのあまり詩が出来た」。この絵の中、川の向こうに青い山がうっそうとして屹立し、ひとひらの流れゆく雲が鳥の翼を追いかけている。楼閣がもやに覆われて、消えたり見えたりしている。筆の先からあらわれる描写の変化は、無限で追い切れないほどである。誰がこの絵を描いたかというと、あの張瓜田だ。すぐれた気韻には、古典を読んできた人の実力が垣間見える。ご覧よ、世の中の多くの画家は、みんな教養も無いくせにめちゃくちゃに絵を描いているじゃないか。

【注釈】張庚―清代の画家。秀水の人。号瓜田逸史等。著書『国朝画徴録』が、当時の画家の伝記・作品を紹介したものとして日本で珍重された。静遠ら明治初期文人の同時代の清朝文化に対する興味がうかがえる。　静遠居士―平賀静遠。風月小誌の編集者の一人。雨森序の注に既出。　鬱―木々が茂るさま。詩経・秦風・晨風「鬱たり彼の北林」。崱屴―山や崖が高くて険しいさま。文選・王延寿・魯霊光殿賦「崱屴嶷釐」。　毫端―筆の細い先。引いて、それが生む書画のタッチ。銭起・門上松を画くを詠む「今看る毫端に起くるを」。　一片行雲―劉禹錫・楽天の真娘墓に和す「一片の行雲応に往来すべし」。　飛翼―翼をはばたかせることから、鳥一般を指す。杜甫・哀江頭「一箭正に墜とす双の

飛翼」。雲の方が鳥を追っているという表現は奇抜。　烟鎖楼閣―烟はもや、かすみ。鎖は覆って外部に対して閉鎖する気持ち。楼閣は二階以上の大きな建物。和凝・小重山其の一「烟は閉ざす柳糸の長きを」。　有又無―一部が見えるかと思うと、一部が靄に覆われて見えないということであろう。ややおかしな奇抜な表現。　誰居―居は疑問、詠嘆を表す虚字。音はキ。春秋左氏伝・襄公二十三年「誰ぞ居（や）。其れ孟椒なる乎」。　張瓜田―瓜田は張庚の号。　秀韻―すぐれた格調、気韻。　堪看―堪は可に同じ。杜牧・感有り「攀折するに堪えざるも猶看るに堪ゆ」。　稽古力―経典や古典を学んで、いにしえの優れた時代を理解すること。書経・堯天「曰若（ここ）に古えを稽う」。劉長卿・落第「官は成す稽古の力」。　君不見―楽府体常用の呼びかけのことば。ほら、ごらん、という感じ。　多少―疑問詞。どれほどの数の。多い数を表す。　丹青―赤と青の絵の具の意から絵画全般を指す。晋書・文苑伝・顧愷之「尤も丹青に善し」。　胸無書巻―文化教養のないこと。五燈会元「文墨は胸中に一点も無し」。　浪―いたずらに。むだに。韓愈・秋懐「胡為れぞ浪りに自ら苦しむ」。　弄墨―弄筆に同じ。画人について述べるので、墨という。李軏・写神する者に贈る其の一「墨を弄し朱を調うること妙なること神の如し」。

老雨云。浪弄」墨。罵二尽万古画人一。万牛挽不レ得。

【訓読】老雨云う。浪りに墨を弄す、万古の画人を罵り尽くしたり。万牛も挽き得ず。

【大意】雨森精翁評。「浪りに墨を弄す」という表現は、これまでの幾多の画家を全て罵倒するような気合いがある。この絵は、いわば、蘇東坡が一万頭の牛でも引っ張ることが出来ない巨大な障碍物を独力で抱え上げて払いのけたようだという黄庭堅の評と同じく、旧来の芸術に蓄積された弊害を一新した作品であるといえよう（平賀君のこの詩自体も同様である）。

【注釈】万牛挽不得―黄庭堅・子瞻の詩句は一世に妙たり・・・「枯松澗壑に倒れ、波濤の春撞する所。万牛挽きて前めざるに、公（蘇軾）は乃ち独り力めて扛ぐ」。

30 春日雑詠三十首之一　　睡仙慵夫

書課倦来憑二小櫳一。春天不レ雨也朧々。鐘声徐度山猶睡。紅紫影沈烟霧中。

【訓読】書課倦み来りて小櫳に憑る、春天雨ふらざるも也た朧々たり。鐘声徐に度り山猶睡る。紅紫の影は沈む烟霧の中。

【大意】「春の日に特に題を決めずに雑多なことを詠む」。読書に疲れて、小窓に寄りかかって外を見ると、折しも春、雨は降らないものの、景色がおぼろでもある。鐘の音がゆっくりと響いてくるが山はまだ静かに眠っている。赤や紫のさまざまな花の色がかすみの中に消えていく。

【注釈】雑詠―雑詠に同じ。特に題名を決めず、自由な題材で詠むこと。詩題でしばしば用いる。謝朓・雑詠三首などが早いもの。　睡仙慵夫―勝田睡仙。風月小誌編集者の一人。漢詩部分最後の二首は、編集者の作品で締めくくった。書課―本来は役人の勤務評定の意であったが、後に勉学や授業を指すようになった。陸游・春雨「窓昏くして書課を減らす」。　櫳―もともとは檻の意であったが、後に窓枠を指すようになった。李煜・搗練子「数声月に和して簾櫳に到る」。　春天不雨―劉基・春曲「春天雨ふらず亦た晴れず」。雨は動詞として用いている。　也―亦の口語。唐詩に頻出。朧々―薄く明るいおぼろな状態。明るさに重点を置く場合もあるが、ここは朦朧の意。夏侯湛・秋哀れむ可し「星朧朧として以て光を投ず」。　徐度―ゆっくりと伝わっていく。胡仔・月に対す「晩凉徐ろに度る一襟の風」。　山猶睡―郭熙・林泉高致・山水訓「冬山惨淡として睡るが如し」。冬の季語「山眠る」の典故だが、ここは山が静かに眠っているかのようであるの意。猶は詩では「なお・・・ごとし」と訓ずることはまれ。まだの意に解しておく。　紅紫―赤や紫の色とりどりの花。韓愈・晩春「百般の紅紫は芳菲を闘わす」。　影沈―月光が沈む場合が多いが、ここは花の色が霞の中に沈んでいくかのように消えていくさまを言うのであろう。兪暉・夏日に友を訪ぬ「万緑新に斉しくして花影沈む」。烟霧―靄や雲を指す。崔湜・春日望春宮に幸するに和し奉る「台榭参差たり烟霧の中」。

老雨云。豊艶。

【訓読】老雨云う。豊艶なり。

【大意】雨森精翁評。ゆたかでつややかな作品である。

【注釈】豊艶―本来は女性美をたたえる語。司馬相如・美人賦「雲髪豊艶」。後、芸術一般のつややかさを指す。素朴、淡泊の対義語。紅紫の語に惹かれた評か。

〔付記〕本稿は、
科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号 19K00296
近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（期間二〇一九～二〇二一年度
研究代表者　要木純一）
及び、
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究共同プロジェクト　近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（課題番号一九一三　期間二〇一九～二〇二一年度　研究代表者 要木純一）
及び
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究プロジェクト　山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト（課題番号　一九〇二　期間：二〇一九～二〇二一年度　研究代表者　野本瑠美のち田中則雄）
による成果の一部である。